

## 新島襄が見つめたもの—良心を巡り—

講演	小崎 眞〔こざき まこと〕
講師紹介	同志社女子大学宗教部長 同志社女子大学生活科学部教授

## はじめに

小崎と申します。過分なご紹介、ありがとうございます。本日のタイトルですが、当初、「心象風景」とか気取った感じを考えておりましたが、あえて「新島襄が何を見つめて生きていたのだろうか」との素朴な疑問に誠実に向き合いたく思い、このようなタイトルに致しました。昨今、同志社内にて頻りに耳にするようになりました「良心教育」、あるいは「良心」という言葉を細解しながら、新島の見つめていた世界を共に探ってみようと思います。有名な良心碑には「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」とあります。一方、「同志社大学設立の旨意」（以下、旨意）には、「良心を手腕に運用する」という表現が用いられています。前者は新島が教え子横田安止に送った書簡の中にある言葉です。一方、後者は徳富蘇峰との合作と言われている「旨意」に出てくる言葉です。この二つの「良心」という言葉の内実には違いがあるのではないかとというのが私の仮説であります。この点は後ほど議論を深めようと思います。

## 偏差値教育とは異なる魂のふれあい

さて、同志社大学神学部の卒業生である佐藤優さんが、5年ほど前の東京新聞に面白いコラムを記していました。5年ほど前の話なので、ご記憶の中にある人もいるかもしれませんが。京都大学での入学試験を発端にして始まる、いわゆるインターネットを使ったカンニング事件ですね。これ以降、センター試験での監督業務が一層厳格化されていきます。とくに、携帯電話に関する注意が、かなり細かくなりました。以下に新聞記事の一部を紹介します。

京都大学など四つの大学入試問題が試験時間中にインターネットの掲示板に投稿された事件で、筆者の母校である同志社大学だけが「現時点では大学が受けた被害の程度は軽いうえ、逮捕された予備校生は未成年で、本人の更生を期待している」として、被害届の提出を見送った。このニュースを聞いて新島襄の「自責の杖」事件を思い出した（佐藤優「自責の杖」本音のコラム『東京新聞』2011年3月11日付）。

法律の専門家ではないので詳細は判りませんが、この種の出来事は被害届の提出により、いわゆる犯罪が成立するようです。被害届の提出がなければ、そこには犯罪性が発生しないので、逮捕が見送られることとなります。察するに、種々の状況の中で、自由な学風の京都大学といえども、被害届を出さざるを得なかったのでしょう。一方、同志社大学は、「被害の程度が軽い」として、この事件への被害届を見送ったようです。ここに同志社の面白さというか、興味深さを覚えます。それは、犯罪者を野放しにするということではなく、深い意味で、その予備校生の状況を汲み取り、誠実に現実と向き合うという学風が同志社の理事会、あるいは同志社大学内にあるということでしょうか。ある一定の価値観だけで断罪したり、排除したりする姿勢ではなく、否定的な眼差しを向けられる事柄をも受容する、そのような姿勢が同志社の中に脈々と生き続けているのかもしれない。この点に関して、佐藤優さんは以下のごとく続けます。

同志社はキリスト教主義大学だ。キリスト教は死刑囚イースを教祖とする。また新島襄は幕末に国禁を犯して国外に脱出した前科がある。発覚したら死刑になるところだった。同志社には国家と別の価値観がある。

新島精神が生きているから東京地検特捜部に逮捕された一番苦しかったときも同志社大学神学部の教師や卒業生たちは筆者を支えてくれた（同前）。

確かに、幕末に坂本龍馬は「脱藩」し、追われる身となりました。ご存知のように吉田松陰は伊豆沖から外国船に乗り込み、海外を目指そうとして捕まり、投獄され、そして命を落とします。そのような時代状況でありました。ゆえに、新島が捕まっていたら、死刑となっていたでしょう。

実は、私は佐藤優さんと同級生でした。話の脈絡から、小崎が佐藤さんを陰ながら支えたというストーリーが展開すると、美しいお話になるのですが、私は全くそのような支援をしておりません。情けないことに、事件を遠巻きに見つめ、私の課題にしない姿勢に安住しておりました。ところが、神学部の先生方は、ご退職になられた先生を含め、佐藤さんが獄中に収監されていた時に、彼を励まし、支えていたということを知りました。同志社は本当に懐の深い学び舎です。だから佐藤優さんは、その恩返しの意味も含めて、現在、同志社大学の客員教授として後輩の指導に貢献しています。佐藤さんは同志社には「偏差値競争と別の魂の触れ合いを大切にす本物の教育がある」（同前）と語り、逮捕された予備校生に対して、来年同学部を受験することを薦めています。

この佐藤さんの姿勢を皆さんと確認したく思い、先の記事を最初に取り扱いました。皆さんを始め、多くの方がさまざまな形で受験を経験していることでしょう。偏差値という枠組みの中で自分の命を測り、自分の歩みを見定めてきたことでしょう。そういう歴史を多かれ少なかれ、皆さんご自身がおもちのことと思います。佐藤さんは「同志社には国家とは別の価値観がある。偏差値とは違う魂の触れ合いがある」と語ります。それが同志社の良心教育、キリスト教主義教育ということでしょうか。その中身は一体何なのか。このあたりを深めたく思います。

## 二つの「良心」表記から

昨今、学内で話題となっている「良心」に関して学びを深めることを通して、同志社教育やキリスト教主義教育の一端をご紹介させていただければと思っています。まず今出川校地の「良心碑」の写真を提示します。創立65周年を記念して、1940年に建立されました。新島襄永眠50周年です。この1940年、私もその時代を生きていたわけではないのですが、歴史を細解していくと、その翌年が真珠湾攻撃の時です。そして、日本の社会が戦時体制へと入り込んでいく時です。同志社の中においては、キリスト教ということを大きな声で言いくい状況があったのかもしれない。そのような状況下で、良心という言葉を用いて、同志社教育を維持し続けたのかもしれない。国家に刃向かうこともなく、かといって国家に巻き込まれることもなく、一つの生き残り策であったのかも知れません。当時の時代状況に鑑みれば、なかなか鋭い知恵に基づいた決断であったとも思えます。そのためか、当初は、「良心を手腕に運用する」という表現が候補であったようです。しかし、ある研究者によれば、その文章は徳富の表現であり、どうも新島のものではないとの指摘があったようです。確かに、「手腕に運用」との表現は、同志社大学設立の旨意に出てきますが、この旨意自体、新島と徳富との合作と言われています。結果、この表現は徳富のものだと判断され、採用されなかったようです。

そこで、あえて、2人の表現を比較するため、資料を作成しました（次頁資料①）。

左側が、同志社英学校で学んでいた横田安止宛書簡の中に出てくる新島の表現です。日本の政治が乱れている状況に対して、苦慮し、失望している教え子の横田に、励ましの思いを送ったのでしよう。その書簡の中に、「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」との表現があります。この「丈夫」との表現は青年男子を意味したため、女子教育の立場からは好まれず、「良心碑」は女子部の中ではあまり注目されてこなかったようです。

一方、右側が「良心を手腕に運用する」という表現の原典です。徳富が、ヨーロッパ社会に学び、自身が著した『新日本之青年』の中で、「クロンウエルカ所謂ル良心ヲ手腕ニ運用スルカ如キノ擧動アルヲソレ疑ハヤク」（10頁）と表現していることが判ってきました。つまりヨーロッパ社会の中に当時すでにあった、一つの間人像、あるいは理想的な生き方が、この「良心を手腕に運用する」姿勢の中にあっただのかもしれない。では、どのような状況にあって、徳富が先ほどの言葉を語ったのか、もう少し探ってみたいと思います。

## 近代日本社会と同志社教育

徳富が『新日本之青年』を出版した1880年代後半、日本の社会はなかなか混乱をしておりました。同志社の創立は1875年ですが、それ以前の1872年には「学制の公布」がありました。いわゆる国民公教育の始まりです。全国を8大学区に分け（結果的には7大学区となりますが）、1大学区を32中学区として256中学校、その傘下に5万3760小学校を置き、国民哲学を目指し、日本の近代化を支える若者を育むシステムを作り上げていこうというものでした。政治家などの次世代を担うリーダーが必要であったのでしよう。社会的リーダーシップが期待され、学制という形で、緻密に計画されていました。「凡ソ私学ハ公学ノ闕ヲ補ヒ通学ノ便ヲ助ケ」と語られ、官を中心にした教育が始まります。それゆえ、公立学校では徴兵が免除されました。一方、私学はそれが免除されない。すなわち官による教育の絶対化、中央集権的教育が中心に据えられました（『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』196～200頁）。そのような観点から、今の私たちを取り巻いているセンター試験を始めとするさまざまな教育のシステム、受験システムを見つめると、若干このような官中心の匂いが残っているように感じます。

徳富はそのような官の教育を補完するような思いで、国家に貢献すべき人物、国家が期待する新しい日本の青年を育てようと考えたのでしよう。それは、「自家自ら自家を支配する」という、いわゆる自律概念に根差し、自分のことをコントロールする人材の養成であったと言えます。そして、「仰いて天に愧ず、俯して地に愧ず、自から自個の手腕を労して、自個の運命を作為するが如き人物を教養する」（『新島襄全集』1138頁。以下①138）と主張しました。まさに近代的自我観に基づいた人材育成を、徳富は期待していたのかもしれない。

それに対して新島は全く違うものを見つめていたのではないのでしょうか。それが新島の「良心の全身に充滿したる」との視座であります。この表現自体を探る前に、新島が「良心の充滿」と表現する文脈、そして、新島が描いていた教育観に関して探りたく思います。新島は中央的教育、あるいは官の教育というよりは、むしろ私立学校による教育を大切にしました。そして人民の求めに応じて、教育をすることが大事だと。そのために、「真誠の教育を地方に敷く」との言葉を残しています。では、「真誠の教育」とは一体何なのか。そのことをまず探ってみようと思います。

## 真誠の自由を愛する

「真誠の教育」という言葉は新島は1882年の段階で使っています。彼は最後までこの「真誠」という言葉を重要視したように思います。「真誠の自由を愛し、」という表現を遺言の中

にも残っています。そこで、新島の遺言から、新島の教育への思いを、一緒に探ってみようと思います。この遺言は徳富蘇峰が新島の枕元で口述筆記したと言われています。よって、新島襄の遺言は徳富の文字です。多分、すでに新島は瀕死状態であり、徳富が懸命に耳を傾けて記したものでしょう。その内容を確認してみましょう。同志社の教育というのは、神学とか、政治とか、文学とか、自然科学とか、どんな分野に従事するとしても、そこには精神力があって、「真誠の自由によって」、国家に尽くすことができる人物の養成を行うと述べています。しかし、徳富は重要なキーワードを聞き落したのでしょうか。結果、その言葉が欄外に記されている「真誠の自由を愛し、」という表現です。徳富は新島の言葉を書面の枠に沿って記しています。記し終えた後、多分、新島は徳富に、「僕の言ったことを、復唱してくれるか」とでも頼んだのでしょうか。その際、重要な言葉が抜けていることに気づいたのでしょうか。「真誠の自由を愛し、」との言葉を入れねば、全く意味が異なるとの思いで、書き足しを徳富に求めたに違いないと言われています。では、「真誠の自由」との表現があるのと無いのとでは、文章全体がどのように違って見えてくるか。次のとおり興味深いことが現れてきます。

「真誠の自由を愛し、」が無かったら、同志社の教育の目的は、どんな学問であれ精神力があり、それによって国家に尽くすように人物を養成しなさいとなります。つまり、国家に尽くすための学問であり、教育と異なります。奇しくも、新島が亡くなった1890年に『教育二閑スル勸語』が発布されます。ご存知のように、この『勸語』は、国家のための教育を求めたものです。とくに天皇のための教育ですね。国家の利益を最優先する教育を打ち立てたのです。「真誠の自由を愛し、」との表現が加えられなかったら、新島の遺言は『教育勸語』とほとんど一緒のことを表すことになってしまいます。同志社教育には、「真誠の自由を愛する」ことを前提とすることが必須となります。そのことを確認したかったわけです。

## 目標が変わると大切なものが変わる

実は、現代にも、国家のための教育ということ、大胆に述べている方が身近におられたので、その例を紹介致します。次に提示したのは、2009年に大阪府立大学の入学式で、当時府知事であった橋下さんが行った挨拶の内容です。

公務員の皆さんも、自分たちがやっていることは国のため、公のため、まあ、そんな感じで税金を使うのは当たり前じゃないか。税金を飯を食わせてもらうのは当たり前じゃないか、というように思っている節がかつてはあったんでしょうかねえ。今はもうそういう時代ではない。また、学問という名において、自分の研究はすばらしいんだから、こんなすばらしい研究のために税金を使うのは当たり前じゃないか。そういうのもかつては認められたのかも分かりませんが、今は、そういう時代ではありません（橋下知事 大阪府立大学入学式挨拶 2009年4月6日）。

つまり、公務員というのは国家のために働く存在であることを宣言しています。そして次のように、府民の血税のことを意識して、大阪府民に還元するために勉強することを求めています。

なぜ、これだけの税を投入して皆さんに学んでもらうのか、しっかりとその意味を皆さんに認識してもらって、簡単に言えば、きちんと大阪府民に還元してもらわなきゃ困る。これは、大学で学ぶ機会もなく、880万人府民の多くの皆さんは毎日額に汗して働きながら、税を納めている。そして、住民サービスを削られながらも、皆さんの学ぶ機会を保障するために、税を納めてくれている。だからこそ、きちんと大阪府民に、大阪に、皆さんは還元しなきゃならない（同前）。

確かに、その視点も大切かもしれません。しかし、国のために勉強してくださいという言葉の向こうには、国のためにあなたの命を差し出さないという、戦前の時代とほぼ変わらない事柄が起こることを許してしまう恐れを感じます。国の利益のために、私たちが命を削って、財産を削って生きることが絶対的な目的となってしまいます。それは、日本の国を守るために何かを提供しようという、滅私奉公の姿勢を尊重することと同じであるのかもしれない。このように考えると、実は目的や目標というものをしっかり見定めておかないと、あらゆるものが目的達成のために利用されることを容認する姿勢を生み出してしまいます。私の知人に「目標が変わると大切なものが変わる」と語った方がいますが、まさに、真理だと思います。この点を確認したかったのです。

あの徳富は、西欧が近代化を進めていく中であって、キリスト教を利用したように、日本社会においてもキリスト教を近代化の道具として使おうとしたのかもしれない。ゆえに、「良心を手腕に運用する」と表現するのでしょうか。いわゆる西欧近代化を目標としたため、良心は近代化のために利用するものへと化すこととなります。

## 同志社での良心理解

それでは、話を再び「良心」に戻します。同志社の中で良心がどの様に語られてきたのか、整理したものを表①として提示します。「良心」に関して、実に多様な受け止め方、表現があることを確認できます。

森田雅憲さんは商学部の先生です。

良心もまた、語り得ない知であり、自ずから個々人の内に燦習されていくものなのです。（中略）自分が良心だと信じられるものに従えばよい、というのが新島のメッセージだと思えます。（森田雅憲「大学で学ぶ意味を考える」『Doshisha Spirit Week講演集』二〇〇五 秋学期 同志社大学キリスト教文化センター 2006年 90頁）

これが新島の語った良心だと理解しています。若干、徳富と似たところがあるのかもしれませんが。先ほど、自分のことは自分で、自分の生活を自分で切り開いていく、そのような自律のニュアンスを徳富の理解の中で紹介しましたが、森田さんも同様の自立概念を良心の中から読み取ろうとしています。

伊藤彌彦さんは法学部で長く教鞭をとってこられた方です。新島研究に関しても、多くの業績をおもちの方であります。伊藤さんは、森田さんとは少々ニュアンスを変えて表現をしています。「良心とは自分で到達した内面的価値判断に忠実である態度」（『レゴ』15 同志社大学宗教部 1988年）と語っています。「内面的価値」という言葉で、精神の奥底にある何かを表現しようとしています。一方、次の2人の方はキリスト教徒です。坂本武人さんは同志社女子大学の先生でした。彼は「世間で言う『良心に恥じる』とか『良心的行為』といった道徳的・倫理的な意味でなく、神の大きな愛を受け入れ、そのみ心に沿った生き方を示すものであり」（『同志社時報』95 同志社 1993年 96頁）と語ります。つまり、儒教的な道徳や倫理ではなく、キリスト教的な要素が良心にはあることを語ります。「み心に沿った生き方」、まさに、同志社の原点であるキリスト教主義やキリスト教精神を具現化することが、坂本さんの言う良心でしょうか。少なくとも、先の2人の方は異なった視点で良心を見つめています。

そして、最後に野本真也さん。引退されていますが、先ほどの佐藤優さんがお世話になった神学部の先生です。長く学校法人同志社の理事長として、重責を担ってこられた先生でもあります。坂本さんとも、少し表現が違います。「私たちの心の奥底に共通に眠っている罪と、そしてその罪をゆるす神の愛を鋭敏に感じ取る人間の共通感覚として」（『良心を手腕に』『月刊チャペル・アワー』229 同志社大学キリスト教文化センター 2000年 40頁）の良心です。つまり愛を感じる、そのような共通感覚を良心から読み解こうとしています。

多分、今日の講義だけではストーンと腑に落ちる感じにはならないと思いますが、このような表現があることを分かち合いたく、紹介しました。今、「そういう意味だったのか」ということが見えなくても、考えるきっかけとなればと思い提示しました。坂本さんと野本さんはキリスト者という点で、同じ立場ですが、お2人の間では、「良心」に対する解釈に大きな違いがあると考えています。この点は後半に触れます。

## 良心理解を巡り

良心の辞書的意味合いを紹介します。坂本武人さんの表現にあったように、「良心に恥じる」、「良心的教育」は、道徳的、倫理的意味合いを含んでいます。実は儒教の中にも「良心」との言葉があり、性善説を唱えた孟子の「良知良能」という表現がその前提にあるようです（金子武蔵編『良心—道徳意識の研究』日本倫理学会論集12 以文社 1977年）。同志社の良心碑は、あの時代状況の中であって、キリスト教的でない雰囲気や匂いながらも、一方で、キリスト教あるいは西洋思想の中にもある共通の言葉としては、実に面白い言葉に注目したことになりました。

良心は英語では「CONSCIENCE」です。この単語は「con」と「science」が合体した言葉で、「共に知る」という意味です。「con」は「共に（with）」、「science」は「知・智」という意味のようです。倫理学事典によると、古代ギリシア時代は「他者と共に」、その後、キリスト教の影響下では「神と共に」、そして、近代社会では「自己と共に」知するという理解です（『現代倫理学事典』弘文堂 2006年）。良心に関する近代的言説を以下に紹介します。あのカント（Immanuel Kant, 1724~1804）は良心を「内なる法廷」と理解していたようです。カントの時代状況に鑑みれば、人間の理性への関心が強く、その意味で「内なる法廷」との表現は興味深いものであります。そのように考えると、森田さんにはカントというか、近代的人間観の影響が強いと判断しても良いのかもしれませんが。西欧文化圏は啓蒙主義からロマン主義へと転換していきます。その流れに即して良心に関する思想にも変化が生じました。以下のフロイトやハイデガーの良心に関する表現も興味深いです。

「超自我」が自我を監視し、欲望や衝動を制御（Sigmund Freud, 1856~1939）

本来的自己の呼び声としての良心（Martin Heidegger, 1889~1976）

伊藤彌彦さんの語る「内面へ到達した判断」というものは、カント的とも言えますが、内面の到達を「内面の奥底」的なものと捉えると、ある種の実存的な事柄を意識しての発言かもしれません。そうすると、伊藤さんはハイデガー的であるのかもしれませんが。

## 新島が見つめた良心

このように良心に関して、同志社内にも種々の理解がありますが、そもそも、新島の語る良心はどのようなものであったのでしょうか。その点を探っていきましょう。そこで新島の良心に関する用法を調べてみると、以下のごとく、英単語「conscience」をカタカナで「コンシヨンス」と一回だけ表記しています。カタカナ表記としては「コンシエンス」等の方が確実でしょうか、新島の表現を尊重して、「コンシヨンス」として紹介します。

「今日些少ノ障碍又ハ少シクコンシヨンスを傷ムル等ノ事ノ為ニ国家之大鴻益トナルベキ伝道ニ損失ヲ与ヘシムルノ時ニ非ス」（③174、『新島襄の手紙』157頁）。

右記は、若くして家督を継いだ弟子に対して、新島が助言した書簡の中に出てきます。その弟子は家督を継いだ責任から、儒教的価値観の影響を受けつつ、家族の将来を考慮し、家族の生活を支えるため、教師になるか、キリスト教伝道のために牧師になるか、進むべき道を悩んでいました。この弟子に対して、彼の心情を忖度した上で、「コンシヨンス」の表現を用い、伝道に生きることを助言しています。

カタカナを用いたことに、新島の弟子に対する意図を感じ取ることができます。弟子は熊本藩校・時習館に学んだ経緯から儒教の素養がありました。また熊本洋学校にてL・L・ジェーン

ズ (Leroy Lansing Janes, 1837~1909) に学び、英語にも長けていました。新島はあえて「コンジョンズ」と記したと考えられます。この弟子は「コンジョンズ」を英単語として理解したでしょう。その言葉を「自己と共に知る」とか、「理性と共に知る」という英語圏での意味として受け止め、自律的良心として理解したのではないのでしょうか。弟子は同志社英学校卒業後の進路を考える際に、現実を合理的に分析しつつ、自給自立を目指し、教師になることを求めたのでしょうか。しかし、新島はここでカタカナの「コンジョンズ」を使いながら、良心に対する、近代的理解を若干批判しつつ、儒教的な良心でもない形で、キリスト教の伝道の意義を語ろうとしました。新島が指摘した「コンジョンズを傷ムル等ノ事」とは、弟子の合理的精神からの痛みであったのでしょうか。さらに、「コンジョンズ」が「神と共に知る」意味をもつことを示唆したのでしょうか。弟子の近代理性主義的な姿勢を批判し、信仰に依って立つ（神と共に知る）ことを助言するためにも、「コンジョンズ」とカタカナで記す必要があったと考えられます。そして、弟子が自己の合理的判断から解放されて、伝道のために生きることへと喚起されることを願ったのでしょうか。そのようなことを、この書簡から読み取ることができるのではないかと思います。

さらに、付け加えて述べるのであれば、新島は儒教的姿勢を批判しています。時間の関係で飛ばそうと思いますが、以下のような儒教批判の証言が残っています。その点だけを提示し、確認しておきます。

支那古風ノ道徳ノ如キハ、其説ク所認美ナラザルニ非ト雖モ到底一般人心ヲ激昂スルノ勢力ニ乏ク（「明治専門学校設立旨趣」①97）

神棚を崇め尊び、天照大神と唱えて頭を下げて拝むようなことは愚かの極みで、ことさら説明しなくても明らかです。ご利益のないことははっきりしています。天照宮も八幡宮も春日大明神も結局私たちと同じように「天上独一真神」により造られた人間です。だからどうか父上には眼を大きく見開いて、人間の手によって造られたこのような偶像に迷われないように願います（「1867年3月29日新島民治への手紙」『現代語で読む新島襄』77頁）。

親子関係についての孔子の教えは、狭すぎて間違っていることに初めて気がついた。その時私は、「僕はもはや両親のものではない、神のものだ」と心の中で言った。その瞬間、父の家に私を固く縛りつけてきた強い絆は、ばらばらに断ち切られた。私はその時、自分自身の道を進まなければならないと感じた。私は地上の両親よりも「天父」に仕えなければならない。（略）藩主を捨て、家や祖国を一時離れる決心ができた〔42歳の時、21歳で脱国するまでの半生を回想した新島自伝の手記 1885（明治18）年8月29日 原英文 前同書 17~18頁〕。

この後、お話をすることありますが、「神と共に知る」という良心の世界は、少なくとも儒教の世界とは違うように思います。「神と共に知る」ということと合わせて、新島の「良心」に関する使用状況を探ってみると、真理、宗教、キリスト教という言葉と重ねて良心を使っている箇所が書簡の中に出てきます。この辺りをさらに探っていきましょう。

## 良心理解の再検証

西洋文化圏の言語体系の中で、キケロは良心という言葉で「レーリギオー (RELIGIO)」であらわれました。キケロが語る「レーリギオー」を私たちは「宗教」という言葉で理解しています。昨今の時代状況にあって、自分自身の言葉で世界の中にあらゆることを還元し、自分の印象だけで言葉を受け止める傾向があるのかもしれない。「宗教は怖い」とか、「宗教は危ない」「宗教は変なもの」といった感じで。私たちが抱く勝手なイメージの中だけで、宗教を判断しているのかもしれない。その事実気付くために、あえて、キケロの言葉を紹介してみました。

キケロは「religioとは、人々をして彼らが神と呼んでいる何らかの高次の存在に対して奉仕と祭儀をささげしめるところのものである」（キケロ Cicero, 『De Inventione』）と語ります。「RELIGIO」は、「自分を超えた存在、自分の手の届かない存在。自分の世界を超越する」何かを想定する姿勢のようです。そして、この何かを「神」との単語で置き換えたのかもしれない。「神」との表現は、超越するもの、絶対なるものの代名詞のごとく理解されてきたのでしょうか。その存在に対して、奉仕と祭儀をささげる。すなわち、それを尊重するということが宗教的姿勢であったのでしょうか。私たちが真理というものに対して頭を下げるということにも似ているのかもしれない。このことを少し違う言い方で表現すると、皆さんがよくご存知の「南無阿彌陀仏」にもつながるようです。「南無（ナマス）」は頭を下げるという意味だそうです。「阿彌陀」とは自分を超えたもの、との意味のようです。「南無阿彌陀仏」とは、私たちの手の及ばないものが世の中にはある。そこに敬意を払いましょう、との姿勢を表現したものでしょう。

新島自身も、自分を超えたものに中心を据えながら、自己中心性から解放されることを願っていったのでしょうか。それが、新島が目指そうとした「自由教育」であると思います。

実は、私は神学部を卒業しておりますが、学生時代は体育会少林寺拳法部に所属しておりました。少林寺拳法部では、先輩に会った際には、必ず合掌して挨拶をすることが部の規則となっていました。少林寺の教えの中で、合掌は各人の中に働いている仏様に感謝を表す行為である、と当時学びました。今回のお話とつなげるかどうかは別としても、少なくとも自分の手の及ぶ世界だけで物事を見ようとしていない点に関しては興味深いところです。

## 「神と共に」を巡り

では、「CONSCIENCE：神と共に知る世界」をさらに深く探ってみようと思います。皆さんを「思索の旅」へご案内できればと思います。先にふれた坂本武人さんの理解と野本真也さんの理解の違いを探ってみます。「神と共に知る」という表現において、この「共に」という言葉の捉え方で、解釈が大きく変わってきます。知る対象との関わり方の違いです。ゴールとしては、この「共に」が同化関係（すなわち、同じものとして互いに知り合うこと）なのか、あるいは、異化関係（すなわち、異なったものとして向き合うこと）なのか、この両者の違いに注目します。

「神と共に知る」世界は、どこかカルト宗教的要素があり、危ない感じが否めません。確かにそのような面を内在しているように思います。つまり、「神と共に知る」ということを同化関係で見つめると、私たち人間が神と一体化して知ることとなります。あまり良い例ではないのですが、ここにあるお茶を使って考えてみようと思います。「お茶と共に」との姿勢は、お茶を飲み、お茶が体内に入ってくる状態とも言えます。同様に、「神と共に」とは、「おお～、神が入ってきた」といった感じで、神と私が一体となる世界を表します。こういう形で宗教的奇跡などを提示することもあるようです。この水を飲むと病気が治りますよとか、この水を飲むとあなたには素晴らしい能力が備わりますよとか、この水さえあれば、あなたは素晴らしい成果を出せます。そのような世界観です。すなわち神が自分と一緒にいる世界です。私を神格化してしまいます。この姿勢は、人間の世界の都合に神を利用することであるのかもしれない。少し難しい表現になるかもしれませんが、人間世界へ神を還元（神の人間化）させることか、神の世界へ人間が昇華（人間の神化）することを導き出します。この姿勢は自己絶対化へと流れ込んでいきます。神と同化する「神と共に知る」世界には、このような自己絶対化への誘惑があります。それゆえ、若い皆さんは、この誘惑に警戒心や違和感を抱くのでしょうか。実は、非常に健全な判断です。

では、新島の考えた「神と共に」とはどのようなものなのでしょうか。大変失礼なことをお話することになるのですが、坂本武人さんの理解、すなわち、「神の愛を受け入れる」姿勢を表面的に捉えると、善人がった態度や清く美しく美し的な姿勢を強要し、そのような偶像に縛られた人間観を育む恐れがあります。この神と同化した視点では、冒頭に触れたカンニングの事件の犯人などは許せない、そのような悪い奴は断罪し、正しい良い人間に更生させるべきとの意見を尊重することとなります。この姿勢に対して、異化の姿勢は自己に還元し得ない対象（神）との向き合いを通し、既存の自己が打ち砕かれ、自己相対化の世界を創出します。そして、その只中で自己の世界の外に新たな世界を切り拓きます。そのような姿勢は、自己絶対化・神格化を導く近代的自律概念を打ち破り、似たもの同志が結束し、違うものを排除するという固定化した世界ではなく、流動的な関係に根差した世界を創造します。これが新島の「良心」世界であったように思います。

ゆえに、冒頭に触れたカンニング事件で、同志社は自分たちの正義だけで学生を断罪することを精一杯遠慮しました。受験生の不完全さに気づきつつも、「大きな被害がなかった」との視点から、自分たちの正義のみで受験生を裁くことはしませんでした。いわゆる多数の常識的判断とは異なる視点から問い直し、赦しの観点を提示したのかもしれない。ここに、佐藤優さんが指摘する同志社教育の魅力、すなわち「国家と別の価値基準、魂の触れ合いを大切にす本物の教育」の姿が顕わとなります。

ここまで話してきた内容を先ほどの表①にまとめてあります。「共に知る」という時の「共に」の対象を何にするか。他、自己、神（自己を超えるもの）といった三つの対象に基づき整理しました。さらに、それぞれに同化的か異化的か、その関係性の差異を意識して整理してみました。関心がある方は、後ほど、ゆっくり考えを深めて頂ければ嬉しいです。

## 私たちの思いを越えて

そろそろ、結論へと進みます。先ほど説明したように、新島は自分だけで完結しない関わりの中で、「共に知る」良心を理解していたように思います。ゆえに、新島は語り合い、対話を大切にしました。そのため、新島には、自分だけで作り上げた研究業績みたいなものは、ほとんどどうか、全く、ありません。残っているものは、人と書簡のやり取り、あるいは人との対話を想定して記した説教原稿やメモのようなものばかりです。すなわち、相手を想定しながら物事を考える姿勢です。この視点が新島の考える良心であると言えます。ゆえに彼は「良心が全身に充滿する」と語りました。自身の内から噴出するのではなく、他によって、外から満たされる姿勢、聖書的な表現を用いるならば、「恵みが満ち溢れる」ということを語りたかったように思います。この「外側から満ちる」という関係性を新島は常に大切にしたいように思います。

以上のことから、最終的に確認したい事柄があります。次の文章に関心を払いつつ、今までの話をまとめていこうと思います。

◇謬さに曰く、一年の謀こと八穀を植ゆるに在り、十年の謀こと八木を植ゆるに在り、百年の謀こと八人を植ゆるに在りと、蓋し我が大学設立の如きハ、実に一國百年の大計よりして止む可からざる事業なり〔「同志社大学設立の旨意」1888（明治21）年11月 ①140。一説には勝海舟との対談から200年を要するとの指摘もある。なお、「旨意」は徳富猪一郎との合作〕。

◇私たちは瓶の中のドングリのようなものです。遅かれ早かれ、大きく育てて瓶を破裂させます（ハーディ夫人宛書簡 1875年 原英文。『新島襄の手紙』122頁。カリキュラムから聖書を除去することに対抗して）。

まず、一つ目の文章ですが、同志社内では頻りに紹介される文章です。現在、同志社は141周年を迎えています。同志社教育の完成までには、まだまだ、時間を要するという意味でこの表現が用いられることがたびたびあります。確かに、人を育てるには時間を要します。新島は、このような時間の長さだけに関心を払ったのでしょうか。

新島がこの文章を記したのは、1888年、亡くなる2年前です。1900年という期間を提示し、1900年後の同志社のことを見つめます。あるいは200年後を。たとえば、私たちは今、100年後のことを考えて、自分自身の命を生きていますが、どうでしょう。私自身、そのように問われたら、考えていません。恥ずかしながら、明日どうするかとか、10年後、定年後はどうするか等といった時間感覚で物事を見つめています。皆さんはどうでしょう。失礼かもしれませんが、多分、4年後とか、何年後かに就職、その後10年ぐらいの内に結婚して、という感じではないでしょうか。そのような中で、100年後です。あるいは、ご自身の晩年期に100年後へ思いを馳せることができるでしょうか。

少なくとも、新島は100年間、生き続けることなど想定していないと思います。しかし、新島は100年、200年先から見つめようとしています。つまり、自分の死後、自分の手の届かない世界をも視野に入れてものを見ていることになります。そういう視点が新島襄の中にあるのでしょうか。優れた科学者や発明家は同様の視点を抱いているように思います。つまり手中に収まらない世界があることを知っていることです。それが、先ほどの「神と共に知る」、つまり自分の手の中に入らないものを想定しつつ、そのものと同化し得ない姿勢の中で、自身や世界を見つめることを示しているように思います。

このような姿勢は同志社の開学の時から、新島の中にあっただけのように思います。続いて、二つ目の「瓶の中のドングリの話」を、同志社女子大学の同僚教員の中村信博さんが、女子大学の礼拝の中でお話ししていたことなどを参考にしつつ、深めたく思います。同志社は開学当初から苦境に立たされます。京都府は、同志社で聖書やキリスト教を教えることを許可しませんでした。この現実の前に、新島は絶望します。そこで、お世話になったハーディ夫人に、泣き言の手紙を書きます。しかし、泣き言を述べた後に、先ほどのドングリの話を書きます。「今私の目には、同志社は瓶の中のドングリのようなものです。しかし、遅かれ早かれ、知らぬ間に大きく育って、瓶を破裂させる」と。新島はこの小さなドングリ(命)が必ず瓶を破裂させるということを確認して、見つめています。ここに、同志社教育の真髄があるように思います。

学部時代、少ヤンチャであった私に対して、神学部の方先生方は誰一人として、小崎優を呼びつけて、「小崎しっかりしろ」というような言い方で怒鳴りつける人はいませんでした。佐藤優さんの獄中時代の話でも分かるように、神学部の方先生方の眼差しには、小崎優という人物の中に、ドングリと同様のエネルギーを見出していたのでしょうか。それは、佐藤さんだけでなく、同志社に学ぶ学生一人ひとりには、教員では計り知れない可能性があるとの確信のように思います。教師側が陥り易い固定化した判断基準から解放され、学生をさまざまな視点で見つめる自由へと抜かれていたと言えます。そのような眼差しが同志社の中にたくさんあったように思います。それが新島の見つめた世界であるのかも知れません。そこで、佐藤さんの言葉を皆さんへのはなむけとして紹介します。

絶対に正しいことは複数あるのです。だから、他人の気持ちになって考えることで、人間はお互いをゆるしあえる寛容の精神が生まれます。

ただ、そのためには自分の確固たる信念を持たないといけません。自分の信念がないと他人の信念を理解できない。信念を持っていないと、見える世界を象徴する拝金教などに巻き込まれてしまいます。世の中には金もけ以外の価値もあると知ってもらうには、宗教的な価値が非常に重要なのです。

(「心のページ 神学から得られるもの 佐藤優さんに聞く」『毎日新聞』2011年3月28日付)

## 同志社で学ぶとは

同志社というのは「絶対に正しいことは複数ある」との事実に基づいている学び舎であると思います。たとえばキリスト教に培われてきた価値観がありますが、一方で、さまざまな正しさが世の中には、たくさんあることを認めています。先ほど紹介した野本さんも、同様のことに気づいていたと思います。ゆえに、人間の不完全さを自覚しつつも、お互いがお互いのことを許し合うことを助言します。佐藤さんの言葉を私なりに受け止めると、この「信念」というのは、徳富の語る自主自立とか、自己とか、私の奥底にある信念ということではなくて、私が到達できない世界があるという信念であるように思います。ドングリはドングリのままでは終わらないという信念との言い方もできるかも知れません。あるいは私の目の届かないところにも、いろいろな世界があるとの信念。つまり見えない世界があることを確信することなのかも知れません。

## おわりに

最後に、当方が記した論考の一部を紹介します。

徳富は「自家自カラ自家ヲ支配スルノ責任ヲ有スルコトヲ認識スル」(『新日本之青年』9頁)ことが良心的人間であると考えた。徳富は「クロンウエルカ所謂ル良心ヲ手腕ニ運用スルカ如キ」(同書 10頁)と述べているとおり、クロンウエルの良心理解を念頭に置いていたことは明らかである。ただし、彼がどの程度クロンウエルについて理解していたのかは、今後の研究を待つしかない。しかし、徳富が近代西欧的人間観に支配された自立性原理に基づく良心を尊重しようとしていたことは、当時の彼の活動や著作からは明らかであろう。

一方、新島の書簡から採られた「良心之全身ニ充滿シタル丈夫」は近代理性と同化(合理化)した若者や絶対者と同化(神格化)した若者を想定してはいない。人間の理性的価値判断を超越し、「キリストにおける神の究極的な業によって革新され、自己分裂から救われて、希望と愛」(『良心』『新聖書大辞典』)に満ちた若者の創出を期待しているのである。自己超越的(絶対他者への覚醒による自己相対化的)姿勢の只中に異なるものを排除せず、自己と他者を生かす「協働・相生」関係が創出されるのである。

キリスト教(主義)教育現場において、教師は自己の能力、資質を相対化するためにも、絶対者について覚醒する必要がある。教師自身が自己正当性や自己完結性から解放されることで、生徒・学生との新たな関係、すなわち討議を基盤とする「スピリチュアル・ユニオン」(「十一月十二日 井深梶之助宛書簡」③675)の創出が可能となる。ここにキリスト教(主義)教育の核心がある(拙著「キリスト教(主義)教育への一視座—新島襄の「良心」理解を中心として—」『キリスト教教育論集』21 日本キリスト教教育学会 2013年を参考に一部修正)。

少々、読みにくい文章を記してしまいました。同志社スピリット・ウィークということでありましたので、「スピリット」との言葉をもじり、新島の「スピリチュアル・ユニオン」という言葉を紹介しておきました。神と共に知る、その良心の世界は、私の中に正しさがあるのではなく、あるいは相手の中にあるのではなく、お互いを越えた、手の届かない世界をお互いに大切にしていこう姿勢かも知れません。そうすることによって、私の正しさのみに胡坐をかかない。相手の正しさのみに支配されない関係が創出します。

かつて、同志社の中で自分たちが大きくなる、多数となることで、自分たちの正しさを伝えていこうとした時代がありました。キリスト教が団結して、日本の社会に大きな影響を与えることを期待して、様々な教派の違いを越えて合同しようとした。このような合同に対して、新島は消極的でありました。大きくなるために少数派を切り捨てようとする態度まで容認される状況でありました。この多数派の傲慢な姿勢は、自分の正しさをかくという自己絶対化を生み出します。そのような中、井深梶之助との対話の中に出てきた言葉が、「スピリチュアル・ユニオン」です。すなわち同志社というのは、スピリチュアルなユニオンを大切にしたいという新島の思いです。

つまり、自分たち人間が作った正しさや、団結心などにより同化していくのではなく、互いの違いを生かす関係性を尊重し合う姿勢です。そのためには自分たちを超えた、対を絶する世界に目覚めていることの大切さを語ったのでしょうか。その覚醒を通して形成される関わりをスピリチュアル・ユニオンという言葉で語ったのだと思います。その関わりの中で、私の正しさも、相手の正しさも、常に絶対的に正しいわけではない、また、絶対的に間違っているわけではないというまなざしに立とうとしているのだと思います。そこに、本当の「同志の結社」という同志社精神が生まれるのでしょうか。ぜひ、同志社で学んでいる間に、私たちが超える視点、私たちの届かない世界が、私たちの見えない世界が世の中にはたくさんあるということに目覚めることができればと願っています。その視点から見つめ直した時に、新しい発見があるように思います。

それは、新島の見つめた世界、100年の大計、200年の眼差しであるのかも知れません。また、ドングリの実の中に秘められた力を確信する視点を共に育むことができれば嬉しいです。同志社での学びの日々が、そのようなことを確認する時間であって欲しいと思います。そのことを唯々願っています。本日は、貴重な機会を与您にいただき、どうもありがとうございます。

## 【参考文献】

- 荒井仁 他編『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局 2010年
- 井上勝也「教育者としての新島襄」同志社編『新島襄 近代日本の先覚者』晃洋書房 1993年
- 石川文康『良心論 その哲学的試み』名古屋大学出版会 2001年
- キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史』教文館 2012年
- 宮本久雄『他者の甦り アウシュヴィッツからのエクソダス』創文社 2008年
- 宮本久雄『旅人の脱在論 自・他相生の思想と物語り展開』創文社 2011年
- 宮本久雄 他編『一神教文明からの問いかけ』講談社 2003年
- 本井康博『千里の志 新島襄を語る(一)』思文閣出版 2005年
- 沖田行司『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』学術出版会 2007年
- 佐藤学『教育の方法』左右社 2010年 33~40頁
- 高崎毅 他編『キリスト教教育辞典』日本基督教団出版局 1969年
- 鶴沼裕子「解説」『小崎弘道』日本キリスト教団出版局 2006年
- 魚木忠一『新島襄 人と思想』同志社大学出版部 1955年
- 徳富蘇峰『新日本之青年』集成社 1887年 9~10頁
- 山本孝司『超越主義と教育—ブロンソン・オルコット思想研究序説—』現代図書 2011年
- Paulo Freire『Pedagogy of the oppressed』Continuum 1990

ポール・リクール『物語神学へ』（久米博 他訳）新教出版社 2008年  
浅井茂紀「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」『千葉商大紀要』千葉商科大学  
府台学会 2003年  
大迫章史「新島襄の『自治自立の人民』像の分析」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』49 東北大学大学院教育学研究科 2001年  
佐野安仁「同志社英学校の開発主義教育」『同志社談叢』13 同志社社史資料センター 1993年  
竹内修一「善を生きる—良心からシュンデレーシスへ」『カトリック研究』75 上智大学神学会 2006年  
竹内修一「良心と福音—誠によるインカルチュレーション」『カトリック研究』72 上智大学神学会 2003年 83~123頁  
新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』全10巻 同朋舎出版 1983~1996年  
現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年  
同志社編『新島襄の手紙』岩波書店 2005年  
同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年  
馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社 1971年  
上野直蔵『同志社百年史』通史編1 学校法人同志社 1979年 53~54頁

2016年11月3日 同志社スピリット・ウィーク秋学期  
京田辺校地「講演」記録

※図の表示はホームページでは省略します。